

第 26 回 S D 国際会議に参加して

山口 薫

JSD 国際担当理事

(同志社ビジネススクール教授、Ph.D.)

2008 年 9 月 1 日

1 参加者

第 26 回システムダイナミクス国際会議 (The 26th International Conference of the System Dynamicis Society) が、7 月の 20 日から 24 日までの 5 日間にわたって、ギリシャのアテネで開催されました。会場はアクアポリスの丘の近くにあるアテネインターコンチネンタルホテルで、夜はライトアップされた世界遺産、パルテノン神殿が夜空に威風堂々と浮かびあがるのが眺望できる学界にはちょっと贅沢な空間でした。地中海性の快適な気候に誘われて、早朝から 1、2 時間かけてアクアポリスまで散歩に出かけた参加者も少なからずいたようです。

以下は、私見を交えたこの学会への参加報告 (感想) です。昨年度は、ボストンにて SD の第 50 周年記念大会が、500 名を超える参加者をえて、華々しく開催されました。それを受けての今年度の学会でしたので、昨年度に燃焼しきりその燃え殻のような雰囲気になるのは否めませんでした。事実、今年度の参加者は 48 カ国 386 名と少なめでしたが、むしろ平年並みと表現したほうが適切かもわかりません。参加者のうち、26% が初めての参加で、また学生の参加者が 31% だったそうです。アテネという地の利もあり、ヨーロッパからの参加者がかなり多いなという印象をもちました。

目下、ヨーロッパの 4 つの大学が共同して SD の修士過程プログラム (European Master in System Dynamics) を立ち上げようとしています。ベルゲン大学 (ノルウェー) ランド大学 (スウェーデン) ラドボード大学 ナイメゲン (オランダ) の 4 キャンパスを受講生が巡回訪問しながら、SD を学ぶというプログラムです (ランド大学を除く他の 3 大学は、SD の過去の国際会議ホスト校です)。こうした新しい試みが、SD の認知度を高め、今回学生参加が増えた一因となったのかもわかりません。

そんな中で今回残念だったのは、日本人の参加者がわずか 2 名で、そのうち小塩篤史さん (日本医科大学) は MIT 留学先からの参加でしたので、日本からは事実上私 1 名の参加であったということです。私は 1997 年のトルコイスタンブールでの第 15 回大会から毎年欠かさず参加しており、今年度で 12 回目の参加となりましたが、日本からの参加者がこんなに少ない大会は初めての経験で、寂しいというよりも、開催期間中ずーと日本支部からの参加者激減のシステム構造に思いを巡らしていました。

SDS の会員の傾向については、Dr. James Lyneis が会長講演にて簡単に分析していましたが、ビジネス・コンサルタント関連の会員が過去 5 年間で 10% 程度減少傾向にあり、逆にアカデミック会員が順調に増加しているとのことです。年齢構成もエイジング傾向にあり、若手会員の増加が伸び悩んでいるとのことでした。

2 研究報告

今回の会議での研究報告は、持続可能な社会、自然エネルギー社会への移行、CO₂削減戦略等といった地球環境モデル、及び医療・保健関係モデルといった2分野が顕著なトレンドであったように思えます（勿論、私1名の情報収集力には限界がありますが）。地球環境モデルは、ヨーロッパの研究者の報告が多く、ヨーロッパでの環境問題に対する関心度の高さを再確認させられたような思いでした。

医療・保健モデルはアメリカの研究者が多く、米国が抱えている社会保険・医療制度の過度の民営化にともなう市場の失敗、及びその社会問題化が反映されているような気がしました。翻って社保庁（厚労省モデル）問題で揺れる日本の国民健康保険制度等のシステム構造を、SDモデルで分析している研究者は皆無に近いような我が国の研究状況に一抹の寂しさを禁じ得ませんでした。この分野における国内でのSDモデル研究、政策提言が早急に望まれます。そんな中で、若手研究者小塩さんのポスターセッションでの報告“Physician’s Burning Out and Human Resource Crisis in Japanese Hospital: Management for Sustaining Medical Services in Japan”に元気づけられました。今後の我が国における医療・保健SD研究の先駆けとなることを念願しています。

私は、国際マクロ経済部会で、“Open Macroeconomies as A Closed Economic System - SD Macroeconomic Modeling Completed”というタイトルで研究報告を行いました。筆者自身の論文をこの報告で取り上げるのは不適切かも知れませんが、過去6年間の区切りとなる研究ですので、一言付言させていただきたいと思えます。私は、複式簿記とSDを組み合わせた独自の「会計システムダイナミクス」というSDモデリング手法を2003年のニューヨークでの大会で発表し、この手法に基づいて、2004年から毎年マクロ経済モデルシリーズをSD学会で報告し続けてきました。今年のシリーズ第5回目の報告で、やっと開放マクロ経済モデルの完成となりました。このSDマクロモデルに立脚したマクロ経済学の動学的方法論は、従来のマクロ経済学のパラダイムを根底から変革するようなものになると確信しております。今回の研究報告を機会にこのモデル（834式）を公開し、広くユーザからのコメントを求め、さらなる改良を重ねてゆくことにしました。（詳細はSDSのWebから論文をダウンロードください）。

数年前から恒例となっている会議前日に開催される博士課程予備論文発表会（Ph.D. Colloquium）も、会場が溢れんばかりの盛況で、Ph.D. 候補者の登壇門のような役割を担いながら、年々充実してきているように思えました。昨年度の第50周年記念大会でこれまでのSDが燃え尽きたようでしたが、そうした燃えがらの中から新しい芽が、地球環境、医療、教育といった分野で吹き出し始めているようで、そうした意味では、まさにSD新元年と位置づけられるような研究報告の数々でした。

ジェイ・フォレスター賞

そうした研究報告の輝ける結晶が、毎年発表されるジェイ・フォレスター賞で、今年度は、ハーバード大学公共保健大学院（School of Public Health）の女性研究者 Dr. Kimberly Thompson と Duintjer Tebbens の共著“Eradication versus Control for Poliomyelitis: An Economic Analysis”が受賞となりました。脊髄性小児麻痺（ポリオ）の撲滅を地球規模で短期間に一気にを行う政策は一見高くつくように見えるが、WTO等が長期にわたってポリオの蔓延をコントロールし続けるような政策費用に比べれば、撲滅費用は大幅に低くなるという結果を、SDモデルを駆使しながら見出した点が高く評価されたようです。Dr. Thompson は、ジョン・スターマン教授の指導を受けながら、MITのSD Groupの研究仲間とも積極的に研究交流を続けてい

たようで、私がMITを訪問した際にも、スローン経営大学院で「SD入門」科目を教えていました（もし私の記憶が間違っていなければ）。

この受賞が契機となり、前述した米国における医療問題の深刻化と相まって、今後医療・保険分野に於けるSD研究の裾野が広がってゆくことになるでしょう。

3 支部/SIG 活動

SIG/Economics Chapter

SDSにおけるチャプター（支部）は、研究分野に立脚したSIG (Special Interest Group) と国別の支部 (National Chapter) の2つに大別されます。今回、私はSIGの一つである経済学チャプターの会長に選出され、今後1年間経済学研究に於けるSDモデルの活用、応用研究活動をひっぱりたくすることになりました。同支部は、約80名のSDSメンバーがリストアップしているかなり大きな支部です。今回のアテネ会議では、“Global Economic Outlook”というラウンドテーブルを企画し、ヨーロッパ、北米、南米、アジアといった4つの地域からそれぞれパネリストを選んで報告・質疑を展開しました。私はアジア（特に日本）の経済見通しについて、IS-LM分析の因果ループ図を援用しながら報告しました。日本支部に於いてもSDを用いた経済学研究が活発になることを願っています。

ナショナル支部

はからずしも今回私は、Economics Chapter と Japan Chapter の2つの支部代表として、Chapter/SIG 代表者会議に参加する羽目になりました。司会はオーストラリアの Tim Haslett です。代表者会議には約20名が参加し、いろいろな話題に話が及びましたが、今回は特にナショナル支部の運営の仕方、支部からの国際会議参加について議論が収斂されてゆきました。運営方法については、学会費を徴収して季刊誌も出版しているようなきちんと組織化された日本支部から、会費もなく任意の集まりのような支部、また南米のように数力国で支部を形成しているようなものまで、千差万別の運営がなされていることを初めて知りました。

日本支部のように国内で約100名を超える支部会員を抱えていながら、なぜいつも国際会議への参加が少ないのか（今回は2名）と質問され、“That’s the problem!” と答えざるをえませんでした。8月22日現在で114名の支部会員だそうですので、こうした支部の規模からすれば毎年少なくとも10名程度の参加が望まれます。同時に、正式の支部として認証される有資格条件はSDS会員20名とのことですので、果たして日本支部に現在もこれだけのSDSメンバーがいるかどうかは、今後の検討課題だと思いました。

Asian/Pacific SD Forum

私がかねがね、日本支部からの参加が少ない原因の一つが言語障壁であり、他は遠隔地参加費用であると思っており、そうした障壁を取り除くためにも、もう少し気軽に参加できる会議が中間にあってもいいのではと考えていました。欧米のSD軸に対して、アジアのSD軸もあっていいのではとの思いもあり、今回、アジア・太平洋SDフォーラムの開催を提案しました。司会の Tim Haslett がこの案をかなり積極的に支持してくれ、その後彼の働きかけで、オーストラリア支部会長の Mark Heffernan や韓国支部会長の Lee Man-Hyung がこれに賛同を表明してくれることになり、目下2010年の韓国での国際会議でこれを実現させるべく話が進行中です。こうした英語を母国語としないアジア・太平洋地域からの参加者中心のSD会議であれば、日本

支部からも気軽に参加していただけるメンバーが増えるのではと期待しております。こうした会議開催にご賛同をいただければと存じます。

これに関連して、韓国の Lee 会長から、2010年開催予定のSD 韓国国際会議の運営委員会への参加を要請され、2010年京都会議を提案した経緯もあり、また国際交流促進という国際担当理事としての業務遂行のために受諾いたしました。

以上、簡単ですが参加報告といたします。